



プロフィール

にれん たかあき
仁連 孝昭

公立大学法人滋賀県立大学理事・副学長、環境共生システム研究センター長を務め、地域と大学、環境と経済をつなぐ仕事に携わる。研究分野はエコロジーエconomics。環境と調和した持続可能な発展について研究している。学会活動では水資源・環境学会、日本環境共生学会などを務める。また、社会貢献活動として公益社団法人滋賀県環境保全協会会長、NPO法人エコ村ネットワーキング理事長、NPO法人アスクネイチャー・ジャパン理事長などを務める。

Prologue

滋賀県立大学 理事・副学長
仁連 孝昭

米原町、山東町、伊吹町そして近江町の合併で形成された米原市はちょうどL字を左右反対にしたような形状をしている。L字の縦棒は琵琶湖に注ぐ湖北の大河川である姉川の上中流域になり、L字の横棒は天野川流域からなっている。それぞれの上流には伊吹山と靈仙山がそびえ、独特な植生が広がっている。両山ともその地質は主に石灰岩からなりドリーネやカレンフェルトなどの石灰岩地域独特的の地形が見られる。そのため、降水は地下に浸透しやすく、時間をかけて地下を流れ下流部に清潔で豊かな湧水をもたらし、これまでこの地域の人々の生活を支えてきた。

下水が湧出し、環境省の「名水百選」に指定されている。靈仙山を源流とする「居醒の清水」は環境省の「平成の名水百選」に選ばれ、湧水量は日量1万5千トンあると言われ、これを源流とする地蔵川にはハリヨの生息が見られ、清涼な流水に揺れる梅花藻が人々の目を和ませている。このほか、多くの湧水が私たちを楽しませてくれるとともに、水田の灌漑用水として、また生活用水として利用されてきた。

以上のように、米原市は水と切り離せない自然に育まれてきたし、その歴史の中で自然とうまく共生する暮らしを築いてきたと言うことができる。しかし、近年になつてこの共生の仕組みが壊れてきていることも見逃すわけにはいかない。第一に、保護されるべき自然が人為的に壊されてきていることである。伊吹山の山頂のお花畠は貴重な植物種が生育し、その規模は西日本随一を誇り、国の天然

三島池は「ため池百選」のひとつに選ばれている。また、天野川はゲンジボタルの乱舞する姿が見られる場所として有名であり、シーズンには多くの人々を魅了している。

地域でもある。三島池は水田への灌漑を目的に、姉川の伏流水を導き灌漑用水の確保のために灌造された。しかし、三島池は灌漑用水の供給に役立っている

記念物に指定されているにもかかわらず、貴重な植生が人為的な損傷を受けている。第二に、これまで人々の営為によつて維持されてきた自然環境が、人々の営為の衰退によつて維持できなくなつてゐる。エネルギー転換により薪炭がいらなくなつたことで二次林を維持することが不要になり、さらに中山間地域の人口減少、高齢化により農業さえも維持できなくなつてゐることが、これら人間の営為を必要とする「里山」の自然環境を壊してきている。自然破壊的な人為が一方では大きくなり、自然共生的な人為が他方で衰退するという二面的な問題を抱えている。自然と共生する持続可能な地域をつくりだすために、この両面を見据えた取組が必要となつてゐる。

第一の問題、「人間活動や開発による危機」に対応するため

には、人間活動を制限することがその解決手段である。人間活動を制限するには二つの条件がある。そろつていなくてはならない。ひとつは人間活動を制限することができ公益をもたらすという、多くの人々の共通の理解である。もうひとつは、人間活動制限のために権限を強くする仕組みをつくりだすことである。後者は法律や条例に基づくものであるが、その担保は多くの人々の理解であるので、やはり自然環境に対する人々の理解を広げることを欠かすことはできない。

第二の問題、「里山など人間活動の縮小による危機」への対応

が簡単ではない。マクロに見ると、日本の人口は減少し高齢化が進むことは明らかである。日本的人口は1・27億人（2005年）から2055年には0・89億人に減少すると予測され、65歳以上人口比率、高齢化率も

20・2^{2005年}（2005年）から40・5^{2055年}（2055年）に上昇すると予測されている（国立社会保障・人口問題研究所、平成18年中位推計）。問題は人口減少、高齢化が一様に進むのではなく、地域によつてアンバランスに進むことである。現在のように中山間地域の人口流出、高齢化がさらに進行していくのか、あるいはそれに対抗する流れが生まれるのか、それによって大きく左右される。現在の人口流出は、中山間地に雇用の場がないこと、教育、医療、文化などのサービスが貧弱であることがその要因となつてゐる。これは現在の価値観を前提にすればいたしかたないかも知れない。しかし、豊かさに対する価値観の変化、働くことへの価値観の変化が起これば、この限りではない。少なくとも、物質的な豊かさを求めるより、心の豊

かさを求める傾向が強くなり、都市と比べて地方での雇用機会の格差が依然大きいものの、都市の雇用機会が減少してきていく。その中で人口のUターン、Iターンがまだわずかであるが生まれてきている。

自然と共生する人間活動を維持するためには、自然豊かな米原市の魅力を伝えていくことが大切であり、二十一世紀の自然と共に生する文化を創出していくことが求められる。それと同時にかつてのような人口規模を想定することはできないことも事実であり、それに合わせた地域づくりの道を模索していくことも課題となつてゐる。

いざれにしても、米原市の水に関わる豊かな自然環境とそれに育まれた文化が地域のよりも育まれることには変わりないであろう。